

家庭—保育所—幼稚園

# 幼児の教育



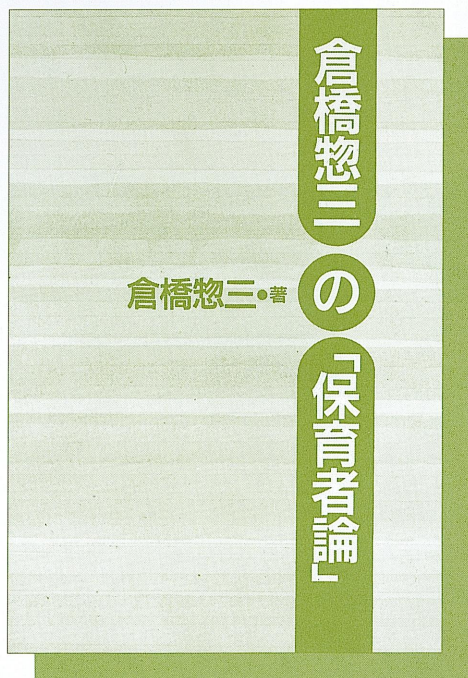
'994



# 倉橋惣三 の 「保育者論」

好評既刊本！

発売中



倉橋惣三・著

倉橋惣三が折にふれ書きとめた

「幼児の教育者」「保母諸君と語る」「教師論」からなる保育者論。

倉橋は保育者に何を望み、どんなことを期待していたのか。

これから保育者を目指す人、今の保育に行きづまっている人、明日の保育を  
よりよいものにしたいと考えている

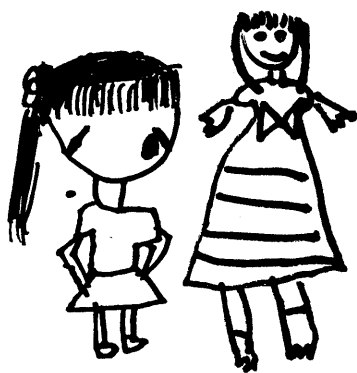
幼児教育関係者におすすめしたい必読の一冊です。

B6変型判 200頁 定価：本体1,300円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼児の教育

第98巻 第4号



# 幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十八卷 第四号 —

© 1999  
日本幼稚園協会

ある日.....(4)

巻頭言 母親.....外山滋比古.....(6)

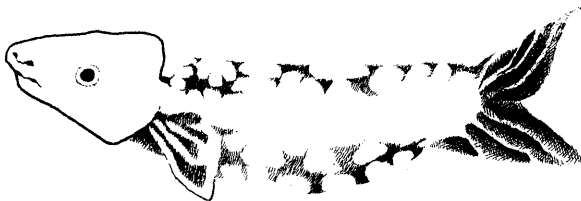
子育ての探究 その一

— 親は子どもに愛情を感じていなかったのか — .....柴崎 正行.....(9)

保育現場からの現代幼児論(1) 幼児の攻撃性 .....友定 啓子.....(16)

子ども時代と私(15) 赤いランドセル .....島田 淳子.....(24)

研究者と保育者とのあいだ—古い記録を取り出して読む— .....津守 真.....(30)



コミュニケーション能力を考える(1)

―葛藤をへて分かち合う心―……………村松 賢一…(36)

風と子どもたちと……………前田志津子…(44)

保育的課題へのまなざし(1)―友達関係の生成をめぐる…戸田 雅美…(49)

二十五年ぶりの教育実習

―イギリス公立幼稚園保育参加顛末(5)―……………豊田 一秀…(54)

子どもの本から しまのずれたとら……………大沢 啓子…(60)

表紙絵／北村 俊道

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たえ「船出」

編集委員／田代 和美・上坂元絵里・吉岡 晶子・田中三保子

編集部／仲 明子





# ある日

撮影・平野 清





## 巻頭言

# 母親

外山滋比古

幼稚園の園長をした。そして、一年で辞めた。体調のよくなかったこともあるが、続ける意欲を失って退陣した、というのが本当のところである。

こどもの母親からの“いじめ”にあった。こどもはかわいいが、母親はすこしもかわいくない。しかも、つよい。いまの幼稚園が弱い立場にあることを見ずかして、勝手なことを言う。もちろん、“いじめ”たりしている自覚はないだろうが、“いじめ”はそういう意識の欠如においておこなわれるものである。

もちろん、全部がそういうわけではないけれども、オピニオン・リーダーが、園の“世論”を誘導する。なかなか政治的である。





リベラルな考えの持主かと思うと、ひどい保守主義である。これまでしてきたことはよいことだときめている。すこしでも変更すれば、なぜ、変えたか、どうして続けないのか。説明したくらいではわかってくれない。だいたい、新しい園長がやってきたりするかと自体が不安だと感じている人たちもいるらしい。新参をすこしいたぶってやるうか、というわけで、ぶつかってくる。母親というもののイメージが変わってしまう。

やたらに行事がある。こどもたちには、なるべく普通の、おちついた、日常を経験してもらいたい。そう思って、行事をへらした。これが母親たち、有力者グループの気に入らない。どうして、へらすのか。幼稚園との信頼関係が崩れる、とおどす声もきこえてくる。

園外へ行つて、一晚をすごす“お泊り保育”をやめることにしたら、これにいちばん抵抗が大きかった。こどもたちが、あんなに楽しみにしていたのに、それを奪う気か。なんとしても継続せよと要求する。行つたこともないこどもが楽しみにして待ったりするわけがない。親たちが楽しみにして吹き込んだに違いない。そういえば、家庭の主婦は、たえず、どこかへ行きたがっている。よそへ行くのはすばらしいことである。その気持をこどもに移して、外泊保育をやれ、や



れとさげぶ。

中には、この幼稚園へこどもを入れたのは（入れてやったのはという響きをもつてきこえる）“お泊り保育”があるからだ、などとんでもないことを口走る母親もいた。

なにを、ねばけたことを言うか、と叱りつけるだけの力をもっていないのが、いまの幼稚園である。母親を敵にまわすわけにはいかない。じつとがまんするしかない。つまり、  
“いじめ”にたえるのである。

現状維持がのぞましいと考える一種の保守主義を無意識に信奉している母親のこどもを預かっている幼稚園は、なにもしないのが、すくなくとも新しいことはなにもしないのが、いちばんということになる。つまらぬことでもいままでしてきたのならよろしい。それをやめるのは、何でも、悪い変化だときめつけてしまう。そういう心情が多くの母親を支配しているらしく思われる。

幼児の教育はこどもの母親の教育である。いわゆる少子化の時代の現実の中で、成人幼児教育への用意のない保育者は、ただ、おろおろするばかりである。さしずめ、私などは、そのあわれな一例だと思っている。

（お茶の水女子大学名誉教授）

# 子育ての探究 その一

—親は子どもに愛情を感じていなかったのか—

柴崎 正行

子育てに自信が持てないという親が増え、幼児虐待も増加しているという。また塾や早期教育がますます盛んになっている。女性や子どもの権利が認められているにもかかわらず、なぜこうした家庭における子育てをめぐる混乱した現象が起こっているのだろうか。その一方で、少年犯罪や荒れる学校などの社会問題が

連日新聞を賑わしている。こうした子どもと育児に係した社会問題を、マスコミや有識者は核家族化や少子化による家庭や地域の教育力の低下のせいだといえ、本当にそうなのだろうか。現在のわが国の子育てを揺るがしている背景には、もっと大きな問題が横たわっているのではないだろうか。

そもそも歴史的にみて、育児とは誰がどのように担ってきたのであろうか。もっとつきつめてみれば、子どもはいつの時代も本当に親や家族そして地域の人々に愛され大切にされてきたのであろうか。また子どもたち自身はいつの時代も充実した子ども期を過ごしてきたのであろうか。こうした子どもと育児に関する問題についての疑問には、どのような分野のどのような研究がどのように答えてくれるのだろうか。

保育学の分野に身を置き、その確立を願って探究して約十年になるが、私自身は残念ながらまだこうした問題に答えられない。私自身がまだ保育学というものの全体像を理解していないこともあるだろう。もしかしたら家庭教育学や教育社会学、家族社会学や文化人類学、さらには民族学や社会史などの分野で、こうした育児の問題をどこまで説明してきたのかを知らないということもあるのかも知れない。

そこでこうした近接領域の研究成果も含めて、今直

面している子どもと育児の問題についての素朴な疑問を、私なりに探究してみたいと思う。これが本連載を書きたくなった理由である。もっと端的に言えば、わが国において子育ては、どのように行われてきてどこに向かおうとしているのかを、現在の学問的な目から見てみたいというのが私の中心的な課題である。

### 子どもは可愛くなかったのか？

私自身は子どもと遊ぶことが大好きである。幼稚園や保育所で幼児たちが楽しそうに遊んでいる姿を見かけたときなど、思わずほほ笑んでしまうこともある。こうした自分自身の子どもに対する愛着的な感情は、人間としての本性であるはずと信じて疑わなかった。しかしフィリップ・アリエスの著『子ども〜の誕生』に出会ったときに、正確にいえばアリエスの学説に出会ったときに、その信念は揺らぎ始めたのである。

アリエスはフランスの人口学を基盤にして、子どもの死をめぐる親の態度の歴史的変化を墓碑や肖像画などを手掛かりにして分析した。その結果、十六、十七世紀を境にしてフランスでは親の子どもに対する態度が大きく変化したということを明らかにした。

十六世紀頃までは、子どもは日常生活において大人と混在しており、仕事や遊びなどの集まりに子どもたちも参加していたという。死んでも墓碑に名前が記録されることはなく、その肖像画が描かれることもなかった。まだ生き残ることがおほつかない時代であったので、親は子どもをたくさん産み、そして子どもは多数死んでいった。さらに子どもは危険な乳児期を生き残ると、じきに徒弟奉公に出されたために家庭を離れて過ごすことが多かった。こうして多産と死亡率の高さ、家庭を離れて学ぶことなどにより、当時の親たちは子どもに愛着を感じるものが少なかったというのである。

しかし十六世紀を過ぎると、子どもを死なせないような育て方をする方が経済的にも有効であるという認識が広がり、子どもを少なく産んで死なせないように大事に育てるようになった。そのため

に親は子どもを大切にするようになり、死んだ子どもの肖像画が出現した。十七世紀になると子どもの肖像画は一般的になり、そこに描かれた服装も子どもらしい服装になっていき、少なくとも上流階級の子どもは大人と異なる服装をしていたという。また子どもたちの教育のために学校が設立され、子どもは仕事をしている大人から分離されて社会から隔絶された教育施設の中で学ぶようになった。親たちは子どもの勉学に関心を抱くようになり、とくに上流階級では現在のような



勉強を中心とした親子の愛着関係が成立していったという。

このアリエスの解釈によれば、現在のわが国にみられるような親子関係はフランスにおいては十七世紀以降に成立してきたものということになる。また子どもを愛着の対象としてみる育て方も、その頃から成立してきたとも考えられる。しかしそれ以前の親が多くの子が死んだからといって、わが子に対して可愛いとか悲しいという感情を持たなかったという解釈には、どうしても納得がいかかったし、今でもまだ疑問が残っている。動物でさえもわが子の死を悲しむというのに……。

### 母親の愛情は本能ではないのか

私の疑問は、E・バダンテールの著書『母性という神話』と出会うことによって、さらに大きく揺らぐことになった。バダンテールはアナール派の新しい歴史

学の流れに属し、十七世紀から二十世紀にかけてのフランスにおける母親の心性史を描いた。そしてその結論は、母性愛は歴史的にみると近代に形成された概念であり女性の本能ではないという、私にとってはまさに衝撃的なものであった。

バダンテールによれば、乳母を雇うという習慣は、フランスでは非常に古くすでに十三世紀には乳母の紹介所がパリに初めて開かれたという。だが乳母に預けるという習慣はもっぱら貴族階級に限られていた。しかしこの習慣は十八世紀には職人の家庭では妻も生きるために働かなくてはならなくなって一般化し、そのために乳母が不足した。そこで貧しい者から裕福な者まで、大都市であろうと小さな町であろうと、子どもは田舎に里子に出され、そこで育てられるようになったという。

一七八〇年にパリで生まれた二万一千人の赤ん坊のうち家庭で乳母によって育てられた子は一〇パーセン



ト程度であり、残りのほとんどは里子に出されたという。平均四年間を田舎で里子として過ごし、そして里子にだされた子の多くが怪我をしたり病気になったが、その当時にはまだ小児科医はいなかったので、多くの幼児が死んだという。

こうした乳母や里親に任せるという育児に対する無関心さと死亡率の高さが、子どもに対する無感覚を生みだし、十八世紀の家族に関する様々な出来事の記録には、子どもが死んだということはほとんど論評されていらないという。また五歳以下の子どもの葬式には親が参列しないことがよくあったという。

十八世紀までの、子どもに対する母親のこうした無関心さはルソーらによって批判されるようになった。そして十九世紀を通じて、自分の乳を与え心理的な絆によって結ばれていく新たな母親像と育児方法が形成されていったという。

母親に母性が求められるようになったのは歴史的な

産物であるという、バダンテールの論は明快でありわかりやすい。しかしそうした歴史的要因があったとしても、母親が我が子との心の絆を大事にする育児方法はもともと存在しなかったのだという育児観は、私にとっては納得いかないものでもあった。母親が社会的にどのような役割を求められたかということと、母親のわが子に対する愛情とは別の問題であるとはいえないだろうか。

### 子どもはいつも

#### 大事にされていた

アリエスに始まり、そしてバダンテールらによって主張されている「十七世紀まで、家庭において子どもは無視されていた存在であり、親子関係も愛情に欠けていた」とする育児観に対



して、大きな疑問を抱き反論しているのがL・A・ポロクである。

ポロクは十六世紀から二十世紀までの英米両国で書かれた日記及び自叙伝から四三三編を選び、これらを詳細に分析した。その結果どの時代においても日記の中では、親はわが子の誕生に歓喜しており、わが子が病気になるれば心配し看病したし、子どもたちの成長を期待していたことを明らかにしている。

この指摘は、これまでのアリエス以来の子ども観を覆すものであり、子どもを思う親の心には変わりがないと主張するものである。またこうした誤解が生じた原因として、絵画や道徳書、育児書というような二次資料を分析したためとし、生きた親と子どもの証言としての日記や伝記を一次資料として用いることの必要性を主張している。

このポロクの著書を見つけたときに、私は我が意を得たりという思いで読み進めていった。しかし読みな

がらまた疑問も生じてきた。ポロクが分析の対象にしている日記や自叙伝を当時書けた社会階層はおそらく貴族などの上流階層であろう。またわざわざ日記や自叙伝を書くような人々は、おそらく自分の行動に対しても自覚的でしかも細やかな記述のできる人であろう。そうした意味で、この一次資料そのものが限られた人々を対象にしているのかも知れない。しかし階層はともあれ、どの時代にも子どもに愛情を抱いていた親が存在していたことが主張されたことは、私にとつては救われる思いであった。

### 親の子どもに対する愛情を

#### どう分析すればよいのだろうか

アリエス、バダンテール、そしてポロクと紹介してきたが、わが国の子育ての問題を明らかにしようとする場合に、まだ検討されるべき問題がいくつか横たわっていることに気づく。

第一に、同様な手法によってわが国における育児の心性史を描き出そうとする場合に、どのような資料を用いるかという問題である。アリエス流に絵画やお墓、服装を分析するのか、バダンテール流に各種の報告書や規則、戸籍書や日誌などを分析するのか、さらにはポロク流に日記や自叙伝、新聞記事などを分析するのか。その分析対象によって検討できる範囲と内容が異なつてこよう。こうした資料の違いをどう関連づけて同時代を多角的に描き出すが問われてこよう。

第二に、アリエスとバダンテールはフランスの子育てについて分析したのに対して、ポロクは英米の子育てについて分析しているのであって、同じ西欧を対象にしても宗教や文化が必ずしも同じではないという問題である。この点についてはポロクも慎重に検討してはいるが、やはり民族や宗教、文化が違えば、子育て観も異なつてくることが予想される。また同じ文化であつても社会階層が異なれば子育ての実態も違つ

てこよう。したがつて西欧流の子育て観の変遷が、わが国の子育てにおいても生じていると決めつけることは避けたい。わが国の子育ての変遷は、わが国の資料を基にして分析し検討されなければならないであろう。また社会階層の違いが子育てにどのような影響を及ぼしているかも検討されなければならないだろう。わが国において、親が子をどのように思い、どのように子育てをしてきたのか、まだまだ私の疑問と探究は当分続きそうである。

(東京家政大学)

#### 文献

- (1) フィリップ・アリエス著(杉山光信・杉山恵美子訳)『子ども』の誕生』みすず書房 一九八〇年
- (2) E・バダンテール著(鈴木 晶訳)『母性という神話』ちくま学芸文庫 一九九八年
- (3) L・A・ポロク著(中地克子訳)『忘れられた子どもたち』

勁草書房 一九八八年

## 幼児の攻撃性

友定 啓子

はじめに

一九九八年は、「学級崩壊」現象が大きな社会問題となった。以前から、中高生の危機的な変化については多様な形で警告はなされていた。神戸の事件は、大人達を震撼させるほどの危機感を与え、「キレル」「ム

カツク」ということばが不可解な彼らの行動を読み解くキーワードになった。ところがこの年に入って、それまで公開されることのなかった小学校の教室での子どもたちの姿が、NHKのドキュメンタリー番組の映像を通じて、公にされた。それまで漠然と抱いていた小学生への不安が、一挙に像を結んだ感があった。

そして今、小学校教師はその原因を幼児教育の現場に求めてきた。幼稚園や保育所で自由に遊ばせてばかりいるからこうなるのだと。入学前に行われる幼小連絡会の席上で、「自分たちは授業をやるのが仕事だから、ちゃんとそれができるようにして送ってほしい」という要望が強く出てきている。私はこの思考パターンに、子ども達の生をまるごと引き受けようとしている、日本の教育の硬直した精神を見る。

### あてもなく離脱する子どもたち

確かに、子ども達の行動は、子どもは授業に黙って応じて当然だと考えている限りでは、それこそ、こちらがキレそうになるようなものだった。

しかし、ことは「しつけ」直せばすむような、そう単純なものではない。大人や教師という立場を一時留保して、子どものところに人として寄り添っていかないかぎり、この問題の本質は見えてこないと私は思

う。子どもを、大人の求める子ども役割に押し込めようとする支配的關係に、子ども達は嫌気がさし、そこからあてもなく離脱しようとしていると、私には思えてならない。これまでの大人と子どもの關係が、足下から崩れかかっている。

私は、映し出される子ども達の幼さに驚きつつも、一方で、そうだろうなあ、十分あり得るという思いもしていた。おそらくこれは、あの映像を見た多くの保育関係者の感想だと思う。子ども達は、自分をもっと見つけてほしいという切ないような渴望感に満ちていた。そして、子ども達のそういう感情に、いちいち向き合っていられない教師達の非人間的な状況も映し出していた。授業が大事なのか子どもが大事なのかと問い返したいくらい、教師達は授業に縛られていて、気の毒でさえあった。教師達は試行錯誤の末、やっと、自分たちが変わらなければ、何も進まないというところに達したようである。

荒れた子一人にゆっくり向き合ってやれないほどの、学校生活のゆとりのなさ、その中で教師達の必死の努力すらも、他の子どもたちの羨望や嫉妬のまなざしにさらされるといふ現実まであった。学校は子どもの感情を受けとめてやることができないでいる。子ども達の感情に地殻変動が起こっていて、教師達は子ども達のやり場のない衝動の標的にされようとしているのではないかと思う。学校のありようも根底から揺さぶられているのである。

もう小学校、特に低学年では、一斉授業の形態そのものを見直した方がいいのではないかと私には思えた。学習指導要領の大改訂が行われ、要求水準が引き下げられた。さらに文部省は学級定員を三〇人に減らす方向を検討しはじめた。それは、現状打開にひとつの力になるだろう。しかしその上でさらに、学校を「子どもと大人が生活する場」としてとらえ直さない限り、そこにいる子どもも大人も人間性を取り戻せないような気がしている。

## 保育現場で

保育の現場では、幼児達が変わってきたという認識はもうとっくに当たり前になってきていて、保育者達の悪戦苦闘はすではじまっている。ただ、社会的にさほど問題視されなかったただけだ。保育臨床学あるいはカウンセリングマインドというスタンスがしきりに言い出されたのは、数年以上も前である。

「臨床」とか「カウンセリング」ということは、すでに子どもが病んでいる、あるいは問題を抱えているという認識の上に成り立っている。「自由に遊ぶ」という自分の意志に基づいた行動さえできない、周囲の子ども達と関わりを持ってない子ども達が着実に増えてきている。それがクラスに一人二人ではなく、数人はいて相乗作用をもたらし、トラブルが連日のように起きる。クラスに不安定な子どもが一人いれば、それに影響を受け他の子ども達も不安定になる。その間を保育者は駆けめぐるって、何とかしてそれぞれの子どもが充



実した生活ができるようにと、日々腐心している。行動的に目立つのは男児だが、かといって女児が安定しているわけでもない。腕力を使わないだけである。

このささやかな論考で、私のとらえた保育現場での幼児の姿から、今、彼らに何が起こっているかを改めてとらえ直してみたいと思う。

### 幼児の攻撃性

梅雨の合間で、久しぶりに晴れた日のことである。四歳のクラスに入って遊んだ。さとする君とまさと君とるみちゃんの三人だ。穏やかに遊んでいたのに、突然、男児グループがさとするのところにやってきて襲いかかるというアクシデントが起こった。状況がわからず、抵抗もしないさとするを、たかしが何度も殴る。や



めそうにないので、私はたかしの腕をつかんで止めに入った。理由を聞くと、「だって、こいつが〇〇を叩いた」と言う。さとするはずっと私と遊んでいたもので、そうだとしても、時間的にずいぶん前のことだ。よくわからないが、仕返しに来たらしい。正義の味方のつもりで叩いているようだ。たかしは「悪いのはさとするだ」と言う。叩かれた人を連れておいでと言ったが、たかしはそれは聞かず、今度は私に向かってくる。しかも、それを見ていた別の子どもまでが私にかかってくるという事態になってしまった。このままでは、乱闘(?)になると思い、その場は立ち去った。担任の先生が事情を聞いて下さった。

こういう姿はそう珍しくない。保育園の一、二歳児クラスで、正義の循環とでも言いたいようなことがある。AがBを泣かすと、たちまちCがとんでいって、Aを叩きに行く。それを見たDが、こんどはCを泣かすというものだ。子どもなりの精一杯の「泣かす子は悪い子」

という表現だと思うが、事情抜きでやるので、ちょっと困る。だんだんわけがわかるようになって少なくなっていくが。

この場合は四歳児だから、相当の理由を持っていると思うが、その理由をことばで言わずに、いきなり叩きにいくところは同じだ。きっかけは正義感だとしても、行動に含まれた感情は違うと思う。私はやむなく力で止めた。その私の行動は、たかしにとつてはいわれのない攻撃を受けたと感じられたのではないか。すぐに反撃の行動が出てくる。それは、何かこう、自分を否定することはとにかく許さないという感じだ。それを見ている子どもにも、連鎖的な攻撃行動が出てくる。感覚だけで動いているという感じで、こうなるとことばは通じない。まずは落ち着くのを待つしかない。

### 攻撃される学生達

この子ども達にはこの日はじめて会った。私は子ど

も達にとってストレンジャーということになる。「ストレンジャーは襲撃される」というのが、四、五歳児の一般原則である。

もちろん、すべての子どもがそうだというわけではない。大多数の子どもは好意的に迎えてくれる。クラスで一人、多くて数人程度の話だ。しかしその何人かがたいへんなのだ。彼らは担任の先生には決してこのような行動はしない。先生との人間関係ができていないからだ。実は、私もほとんどやられることはない。少し年配になっているので遠慮してくれるのだろう。

しかし、学生が観察や実習でクラスに入ると格好の標的にされる。学生達は不器用ではあるが、基本的に子どもに対して好意的である。それ故こういう子どもの攻撃に対して無防備で、驚き、混乱してしまう。怖がったり、適当にあしらったり、へたに受け入れたりしてしまう。きちんと対処しないと、子ども達は学生に對して、「攻撃しても反撃しない、弱い、おもしろい」と認定してしまう。そうなると、子ども達の行動はエ

スカレートする。はじめはふざけ半分であつても、その内に自分が仕かけた行動と相手との応答の中で、ハイテンションになつてしまい、自分をコントロールできなくなる。そうなったら、「やめて」とか「痛い」とかいふ相手のことは耳に入らなくなつてしまう。それを止めにはいると、また反撃していくのである。

相手も自分も見えず、相手にも感情があるということ、相手は痛いのだということに、思いが行かない。思考回路が切れてしまうのではないかと思える。攻撃感情に引きずられ、自分が何をしているのかとらえられていないのだから、当然かもしれない。

### ねじれ表現としての攻撃

学生の方は、幼児とうまく遊べるだろうかと不安を持っていてところへ、はじめからこんな幼児達に出会ふと、自信を失つてしまう。自分は子どもに嫌われるらしいと思つてしまう。もちろんこういう現象は、ずっと以前からあつて、私も数年前までは保育実習の

洗礼だくらいにしか思つていなかった。しかし、学生達も変わつてきていて、これを受けて立つことができない。すると、子ども達の攻撃は発展してしまう。私は学生達に作戦を授けた。

こちらがやられるだけの遊びにはつき合わない。攻撃をしかけてくる子どもは、しっかり自分の方を向いてほしいという気持ちが底にある。充実した遊びを見つけられないでいる状態でもある。その子に「たたかれるのはいやだ」とはつきり言い、真剣に向かう。基本は、中心になつてゐる子ども達と心を通わすこと。

「○○君とちゃんと遊びたいから、別のことをしよう」と提案する、というものだ。学生達は覚悟を決めて、以前より落ち着いて子ども達に対処した。

「今回も、始まりはまことからの攻撃であつた。彼はきょう、武器を持つてパワーアップしており、着替えの入った袋をブンブン振り回しながら向かってきた。

「またしてもこれか」と思つたが、講義での先生の「基本は子ども達と気持ちを通わすこと」ということ

ばを思い出し、『何でたたくの？痛いなあ』と言い、まことに近寄った。すると、少しはにかなだような笑顔が見えたのだ。少し気持ちが通ったような感じがした』（四歳児）。

「最初私は子どもに攻撃される役だった。子ども達も『お前は誰だ』としきりに聞いてきていた。私は子どもからしてみれば、急に自分たちの前に現れた見知らぬおばさんだったに違いない（私は小さい頃、二十歳以上の人はおばさんだと思っていた）。それでとりあえず攻撃してみても、どのくらい自分たちと遊んでくれるのかを試している感があった。ずっと攻撃しているうちに、子ども達は、私は敵ではないと認識してくれたいらしい。むちゃくちゃな攻撃はされなくなった。すると今度は“遊びに参加させてあげてもよい存在”に格上げしてもらえたいらしい。一緒に何かを作ったりする遊びに入れてもらえるようになった。そうして遊んでいるうちに、私は“お前”ではなく“先生”と呼ばれるようになつた。扱いも、攻撃の標的でもな



く、また“遊びに参加させてあげている人”でもなく、一応子どもなりに気を使ってくれるようになった。

私はだんだん変わってくる自分に対する認識にとまどいながらも、子どもとの関係をつくっていくことの大切さを感じた。またそれは、子どもとじっくり関わっていかなくてはできないものだと感じた。子どもの気持ちをひとつひとつ受けとめてやるのが、関係をつくっていく上での第一歩だと、今回の観察から感じた』（四歳児）。

このように、子ども達はねじれてやってくる。しか

し、こちらがちゃんと自分を差しだし、相手に向き合うと、驚くほど素直な表情を見せる。

「廊下にいると、前回私に叩いたり蹴ったりしてきたとしゆき君が近寄ってきた。『なんだ、お前。この前くるなって言っただろう』と叩いたり蹴ったりというしぐさをする。そして手を握ってきた。少し甘えたしぐさをする。私は『ねえ、覚えてた』と聞くと、『覚えてるよ。この前から覚えてるよ』と、手を握ったままにいる。そして、しばらくして保育室の中に戻っていった」(五歳児)。

一見、攻撃的ともいえることばの陰に、こんな気持ちが隠されている。しかしこちらが少し対応を間違えれば、拒否的な感情を誘発しかねない場面である。

幼児は、自分の感情に率直に行動する。今も、大多数はそうである。しかし、このように人を求めているのに、それがねじれてしまつて、正反対の攻撃的なことばや行動になるのは、どういうことだろう。求めているものは、どうせ満たされないのだというあきらめ

や怒りが、そうさせているのだろうか。あるいは、そういう強い挑発行動をとらないと相手は自分の方を向いてくれないと、学習しているのだろうか。相手が自分の味方であるかどうか確かめるのに、なぜ、さんざん攻撃しなければならぬのだろうか。そんなに人を試さなければならぬほどの、不信任感が横たわっているのだろうか。許されるなら、人を殴りたいという衝動は、どうしたらいいのだろうか。

ただわかるのは、子ども達一人一人が、自分をしっかり受けとめて欲しいと願っているということである。家庭ではどんな人間関係を結んでいるのだろうか。案外、そのような感情が、受けとめられていないのではないかとも思われる。そうだとすれば、教育の場でそれを引き受けていくしかないだろう。

(山口大学)

子ども時代と私  
(15)

## 赤いランドセル

島田 淳子



### 幼い日

私は昭和八年六月、木曾谷の真ん中にある谷底の町、木曾福島に生まれ、そこに育った。父は山脈を一つ隔てた伊那の人で、実家の家業である染め物屋の木曾営業所主任兼小使いみたいなことをしてい

た。和服地の染めを依頼されると、反物を持って伊那へ行くのであるがだいたいにおいて暇で、時折り私に木で玩具を作ってくれたりした。母はいつもせつせと反物の洗い張りをしていた。日本手拭いを姉さんかぶりにした割烹着姿の母が、庭いっぱいに広げた布に向かって伸子<sup>シシ</sup>を一つ一つ棘<sup>トゲ</sup>している姿



は、母に対する私の原風景である。

私は予定より二か月も早く生まれた未熟児だった  
それで、何かと言えば熱を出して寝込んだそうだ。

その当時のおおかたの家がそうであったように、わが家の暖房は、気温が氷点下になる冬季でもこたつだけであり、血の巡りが悪い私は冬になると手に霜焼けができた。そのうえそれはいつも膿んでしまうのであった。両手が見えなくなる程、包帯でぐるぐる巻きにされ、毎日の取り替えが痛かった記憶がある。五歳になつて妹が生まれるまでは一人っ子で、毎日一人で本を読んだり、絵を描いていたそうである。熱を出す以外にはとくに親を困らせたこともなかったようで、何をしてものろいのため息をつかれた以外にあまり叱られた記憶もない。口数も少なく、青白くて生気のない子どもだったようである。そんなわけで幼児期に友達と遊んだ記憶もないし、もちろん幼稚園にも行かなかった。

### 小学校入学を前に

初めての集団生活は小学校からである。その前後のことは、数十年経った今もなお鮮やかに心に残っている。日一日と迫つて来る入学式を前に、私は初めての集団生活に対する不安と期待でいっぱいの日を送っていた。セーラー服ができ、草履袋ができ、日毎に緊張が高まるのを感じながら、私はランドセルがまだないことに秘かに心を痛めていた。今日は買ってきてくれるか、今日は買ってきてくれるかと秘かに期待し、毎日秘かに失望していた。そして失望がそろそろ限界に達しそうになった入学式の三日前、ランドセルが届いた。赤いランドセルである。蓋を開けると、裏は白い布張りになっていたのであるが、惜しいかな、布の一部が破れており、真ん中あたりに数センチ程度の穴が開いていた。「ここだけちょっと残念だけど良いランドセルだね」と努めて何気なく話す父親の気弱そうな表情が、今も

はつきりと記憶に残っている。

### 愛されている確信

その時どんな言葉で応答をしたかは覚えていない。ただ私はこんな穴など全然気にならない、というのを両親に分かってもらわなくてはと必死だった。その気持ちを覚えていた。

今思い出しても、我ながらいいらしいと思ってしまふのであるが、あの時なぜそれ程まで必死になったのであろうか。それは、私が父母に絶対的に愛されているとの確信があったこと、したがってこれが両親にとつて精いっぱいであると判断したこと、それならば両親を悲しませてはいけないと思ったことから生じたと考えられる。

子どもというものは想像以上に大人の状態を理解しているものであると思う。そして親またはそれに代わる人から十二分に愛されていると実感できることは、子どもが健やかに成長するために空気のような



に必要不可欠なもので、この点がしっかりしていれば、かなりの逆境にあつても真つ直ぐに育つものであるというのが、私の体験から来るささやかな保育論である。

### 生活の激変

小学校に入学してまもなく私の生活は一変する。数年後に日本人の生活を極限まで追い詰めることになる戦争の影が、木曾の谷でささやかに暮らす親子にも忍び寄ってきたのである。

母の実家は、同じ木曽福島で木曾の糰味噌を製造販売する味噌屋であった。その中心にいたのは母の

父と弟である。母の弟が突如軍隊に取られ、後を追うように父親が若くして急逝してしまった。どういう話し合いがなされたかは知る由もないが、程なく私達一家は母の実家へ移った。そこには曾祖母、祖母、二人の叔母、数人の従業員がいた。しかも叔母たちの一人は私より二つ年上で、もう一人は一つ年下であった。二人ともとても元気が良かった。親子だけの静かな生活から、十人以上の大家族への突然の激変であった。

### 味噌屋の毎日

味噌造りの人びとの動きは活発で、いつも忙しそうであった。朝早くから米を一斗ずつ洗う洗米機のしやりしやりした音が聞こえ、まもなく米を蒸し上げる甘い匂いが家中にただよってくる。蒸し上がった米を大きな筵の上に広げて味噌を加え、みんなで筵を囲んで手でこしこしと混ぜ合わせる。それを一升ずつ味噌蓋に入れて薄く伸ばし、厚い壁の味噌室に

入れる。そうこうするうちに大豆が茹で上がり、それを挽き肉機みたいなもので潰す。これに味噌を加えてこね、直径二十センチもあるうかという味噌玉を皆で作って、並べるのである。それは活気に満ちた風景であった。

台所もまたせわしげであった。大きな鉄の釜に厚い木の蓋をして、その上に大きな石の重しをおき、母がご飯を炊いている。竈に薪を入れ、火吹き竹に思いつきり息を吹き込んでいる。丸く膨らんだ母の頬がこれ以上赤くなれないほど赤くなったころ、火がパツと燃え上がり、火勢は次第に強まってくる。囲炉裏には黒光りした自在鍵が釣り下がっており、そこに掛けられた大きな鉄鍋のなかで味噌汁が煮えている。背の丈以上もある樽の中には一年中食べるのに十分な木曾菜が漬け込まれていて、毎朝山のよう

に食卓に登場した。そこへ人びとがどっと集まってきて、食事が始まる。ひとりひとりが各人の箱膳を持っていて、その

なかから食器を出して、自分で盛りつけて食べる。  
それは活気とスピードに満ちた情景であった。

### 人間関係への試練

このような生活のなかで私を秘かに悩ませたのは祖母の態度である。私は母の十八歳の時の子であり、年回りから言うところと祖母たちと三人姉妹のようであった。周りの人達はそのように扱った。しかし祖母は違った。心のなかに何か私に対する冷たいものがあった、それが私の心を冷え冷えとさせるのであった。何とか暖かく接して欲しいものといくぶん努力はしてみたが、どうすることもできなかった。

祖母は、五歳下の私の妹を初孫であるかのように溺愛した。妹は私と正反対で、体も丈夫で自己主張も強く、行動に創意工夫があり、誰でもつい愛したくなるような資質を備えていたから無理もない部分もあったが、後になって、よくひねくれないで育ってくれたと母が述懐したところを見ると、この差別

はかなり露骨であったようである。

今になって見ると、祖母の気持ち的理解できる。私の存在そのものが、幼くして父親を亡くした自分の娘たちへの不憫さを増したのであるう。年端もゆかぬうちに戦場に引っぱり出された一人息子への思いもあったと思う。後年、道で傷痍軍人に会ったことがある。薄汚れた白い着物にカーキ色の軍帽をかぶり、物乞いをするその人を見た時、祖母の目にさっと涙が浮かび、日頃の祖母からは信じられないほどのお金を差し出した。その時初めて私は祖母の心の奥底を覗いた気がし、初めて祖母に人間味を感じたのであった。



ともあれこの時期、私は戦争が終わった、そして叔父が帰ってきたら、また元のような平和な暮らしが出来る、それまでの辛抱だと自分に言い聞かせて、小学校時代を過したのであった。そしてまた、黙って耐えられたのも、両親に絶対的に愛されているとの確信があつたからである。

## 終戦

昭和二十年、私が六年生の八月。戦争は終わった。叔父さんが帰ってくる！心躍らせた私は、そのころは四人になつていた弟妹を近くに連れ出した。「戦争は終わった。叔父さんが帰ってくる。これから家族水入らずで暮らすのだ。貧しいから、欲しいものも買えないかもしれない。でも家族水入らずで暮らすのだから、我慢しようね」。

六年間堪え忍んだ思いを一気に吐き出すかのよう、日ごろの私とは思えない情熱的な調子で語つた私であつた。しかし、今考えると当然のことではあ

るが、弟妹の誰一人として私の言葉を理解しなかつた。

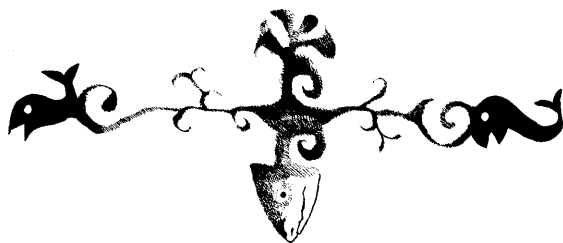
こうして私の小学生時代は終わった。あれほどまでに私が帰還を待ちわびていた叔父は、私達の世代なら誰でも知っているインパール作戦で戦病死して

いた。

## 終わりに

執筆の機会を頂いたおかげで、久しぶりに思い出した数十年前。それは長い歴史から見ればまばたき一つ位にしか相当しないものであろう。それなのにあのころの私たちの生活を彩っていた生活用品のほとんどのは姿を消し、生活の風景が一変していることに改めて驚きを禁じえない。一方で、愛すること、はぐくみ育てることの重要性は、時代を越えて変わらぬ本質的な意味を持つことを再認識した次第である。

(お茶の水女子大学)



# 研究者と保育者とのあいだ

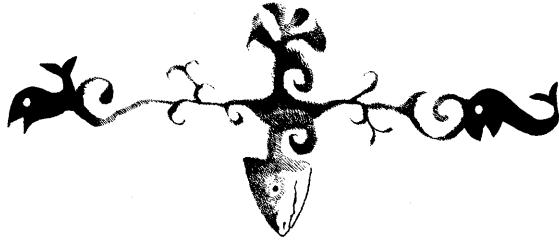
—古い記録を取り出して読む—

津守 真

関心がないようにみえても、子どもは大人の存在を感じている

昭和四十五年当時、私は週一日だけ保育の現場（母子愛育会家庭指導グループ）に出ていた。

園庭の外から垣根をへだてて庭を見ると、子どもがふたりいた。私はしばらく見ていて、園庭に入ろうかどうしようかと迷った。Tくんは木片をまっすぐに動かして地面に線をつくっていた。私のほうを振り向きもしない。私が庭の内に入ってもこちらを見ない。しかし、私はここまで来て、もう一步踏み込まないのはいけなような気が



がして、そこにしゃがんでいた。

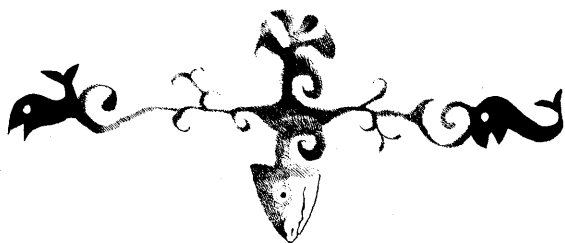
Tくんは庭の中央に近いブランコから、出口まで木片を動かし、二度ほど往復した後、しゃがんでいる私を見てにつこり笑った。私は「長い線路だなあ」と言ったら、私の膝に座りに来た。まもなく自分からおりて、また木片で地面に線をひきはじめた。

子どもは私を見たときから、なにも話さず、近寄ってこなくとも、私の存在を感じていたことが分かる。私はそこに留まってよかったと思った。もしも、この子は私に関心がないからと思つて去っていたら、遊んでいた大人が突然いなくなるのと同じくらい、私はこの子を裏切ったことになる。Tくんはその後もずっとそれをつづけていたが、私が砂場でもうひとりのIくんを相手にしはじめてからは、線路が庭を横切つて私のいる砂場の方に向かってきた。一時間ほどして、弁当になったとき、私は、「T君の汽車はお弁当ゆきにしてください」と言うと、自然に保育室に入った。

子ども自身がどうしてよいかわからないとき

もうひとりのIくんは砂場の近くで泣き顔で、自分の頭をたたいてひっくりかえっていた。

人はどうしてよいかわからないとき、自分の頭をたたき、自分のことを「ばかやろ

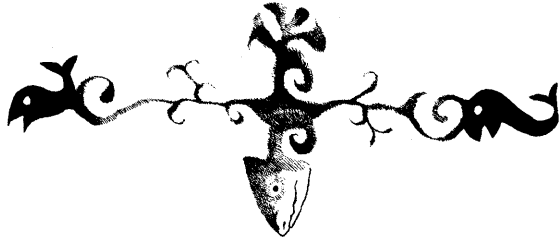


う」と言つて自嘲する。おとなにもどうしてよいかわからないことが沢山ある。そのときは、Iくんはこれに近い思いだったのではないか。Iくんのその前の状況を私は全く見ていない。しかし、ことばを話さないIくんには、どうしてよいかわからぬときが、一杯あるに違いない。砂場にはTくん、Iくんなど、三、四歳の子ども数人が一緒にいた瞬間があった。私はどうしてよいかわからぬ問題をたくさんかかえた男たちの集まりを感じた。私も分からぬ問題をかかえた人間のひとりである。すべてわかった世界にいる人などこの世にはいない。分かったように思つても、実はその内側にもう一歩いれば自分自身の当面する問題と格闘している。保育実践者は、それを未来に開くのを助ける人のことである（その場において私はこんなことを考えていた）。

Iくんは弁当のとき、私が部屋に入ったらついて入ってきた。すでに弁当にいく気分だったのだと思う。でも食卓にはつかずにうろうろしていた。こういう行動を、そのときだけを見て、「弁当なのにふらふらして席につかない」と決めてしまつたら間違ひである。Iくんの行動の前後をみていれば、この子は食事にゆく気分になつていたことが分かるし、その気分を行動にあらわすのがむつかしくてこの子は困っているのだと言えるだろう。Iくんはこの日はもはや自分の頭を叩くことはしなかった。

この頃、母親たちに、かわるがわる保育に参加してもらつていた。Iくんの母が保育室に入つていた。午後になつて私は母親たちと話し合いの時間をもつた。





Iくん母「先生のお手伝いをしようとだけ考えていたんです。保育室に入る前にはどういう子どもさんか分からなかったけれど、いろいろな子どもさんがいることがわかり、どの子どもも可愛いって思いました。とっても可愛いと思いました。Tくんは歌がうたえるんですね。」

私「Iくんは自分でもどうしていいかわからないことがたくさんあるんだけど、きつと、分かりかけてきたことがあるんですね」と今日の私の体験を話した。「弁当のとき、食卓の傍まで来ても食卓に向かうことはしないで、うろうろしているのは、きつと、どうしてよいかわからないでしょう。一緒にやっているうちにだんだんはつきりしてくるのでしょう。私たちにも、子ども自身にも。」

私はT君についても、私の今日の体験を話した。

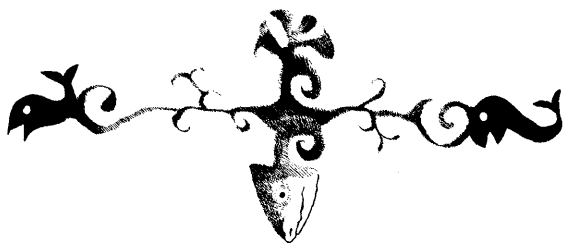
私「T君は、知らん顔していても、他人を気にしているのではないのでしょうか。」

Tくん母「私はそんなことは気付きませんでしたけど。でも、家でテレビを見ているとき、見ていないと思って消したら、とても怒ったんです。」

私「T君は他人に関心がないのではなくて、もしかしたらとても気にしているのかもしれない。そう思ってたかどうか。やってごらん下さい。」

(一九七一年一月十九日)

週一日だけ保育の現場にゆく人には、遠慮やためらいがある。他の日のことは知ら



ないで何がわかるのかというひけめもある。その謙虚さは必要だが、心身を集中させて子どもと交わった貴重なひとときは、保育者の原点であると思う。一日をしつかりと付き合ったときには、自信をもって保育と子どものことを語ってよい。それは専門家だからではなくて、子どもと率直に人間として付き合ったからである。

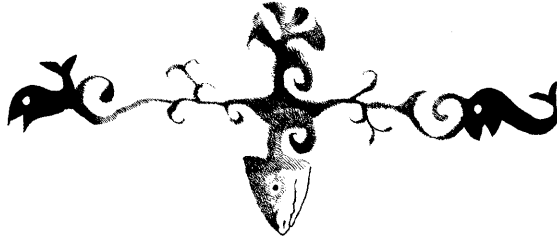
付

前月の母親懇談会（一九七〇年十二月十日）では次のような話題で話が進んだ。その頃の親たちの悩みを反映していると思うので次に記しておく。

母A「保育にはいる前はもっとしつけをしてもらいたいと思っていたが、（一緒にかわってみて）ここでもっとたいせつなものが育っていることが分かりました。」

母B「うちの子は自閉症って言われたんです。だから自閉症の治療をしたほうがいいんじゃないかと思って。いろいろ読んでそうだと思い、専門病院に行ったんです。そうしたら、入院させたほうがいいっていわれて、はじめはどきとしたんです。病院の先生は、ここでは軽症で治る見込みのある人しか入院させないと言われました。」

私は、入院はよくないこと、それは、家庭でやってゆかれない事情ができたときだけ



であることを説明。

母B「私もそう思っていたんです。だけど軽いうちに入院させたほうがいいって。」

私「あなたの子どもさんは入院させたことでもつとショックをうけるでしょう。」

母C「うちも自閉症と言われました。ここで先生がひとりついて公園に行くのもそれと関係があるのでしょうか」（私はそんなことは考えてもいなかった。）

母Dが、あらたまって言った。「先生にお話したいんですけど。先生が子どもを見ていらして、もしも母親のせいではないかと思われることがあつたら、皆の前では言いにくいことであれば、ひとりずつ面接して言ってくださいませんか。」

私「かりに自閉症としても特別な教育はないんです。この子のことを考えて、日々子どもに答えて保育をすることが必要なんで、自閉症の教育が必要なのではないのです。」

母E「うちの子はいつも空中に手をかざして振る癖があり、自閉症の症状だと言われました。」

別の専門から見たら〇〇症と診断されたとしても、保育者は、どの子も例外なしに、悩みや願いをもつ一人の子どもとして見て交わる。——いま、そのことが一層はつきりとわかる——

# コミュニケーション能力を考える(1)

―葛藤をへて分かち合う心―

村松 賢一

このところ、ちょっとした「コミュニケーションブーム」である。少なからぬ大学でコミュニケーションを冠した学部が新設され、「コミュニケーション学の招待」といったタイトルの書が相次いで出版されている。言語とコミュニケーションの研究を正面に掲げた学会も最近発足した。新しい学習指導要領が告示さ

れ、精細な文学鑑賞に偏りがちだったこれまでの国語教育をあらため、「話すこと・聞くこと」を重視する方向が打ち出されたこともあり、言語・教育系雑誌は競ってコミュニケーション能力をめぐる特集を組んでいる。中でも注目されるのは、「二十一世紀の日本におけるコミュニケーション教育」(コミュニケーション

ン研究者会議、九八年五月）、「日本の学校にいかなるコミュニケーション教育が必要か」（異文化間教育学会、同年同月）などのシンポジウムタイトルが示すように、従来、学校教育に関心のなかった学会までが、その教育の有り様を論じ出した点である。

ところで、ここまで自明のことのように扱ってきたが、コミュニケーションとは一体何なのだろう。とあらためて考えると、意外に定義することが難しいことに気づく。特に、教育の対象としてのコミュニケーション能力となると、急に輪郭がぼけてくる感じをもつのは筆者だけだろうか。そこで、本誌上を借りて、何とかこれからの議論の手がかりを見つけられないか、思考をめぐらしてみたい。

### 分かってもらえない哀しみ

#### 幼稚園の遊戯室で

四歳児のさとし君が大きな積み木を組み立てて何か作ろうとしている。積み木は三種類。長方形のものは

首くらの高さがある。正方形は顔より大きい。細長い板は幅が五十センチ、長さが一メートル、厚さ三センチくらいか。今しもさとし君は、その板にまたがって両手をかけ、持ち上げようとしている。どうやら、それを既に積み重ねた積み木に立てかけて滑り台のようなものを作りたいらしい。かなり重いと見え、手が滑って板は床に落ちてしまった。その拍子に、片方の手先を挟んだ。「いたー」。さとし君は指先に、はーつ、はーつと息を吹きかける。それを、友達の子が二人すぐ近くでじつと見ている。さとし君は、傷めた指をもう一方の手で押さえながら、「だれか持ってー。だれか」と二人に声をかけた。以下は、その後の会話である（なるべく発話に忠実に再現した）。

男児1 はーい（高い声で）。

男児2 はーい（低い声で）。

さとし君 ばくこもつから、あきくんはここ。上げ  
て。

(三人で板を頭の上まで持ち上げる)

男児1 わっせわっせ。

さとし君 もういいよ。はなしてー(頼む調子で)。

(板を、二つ重ねにした箱に立てかけようとするのだが、何度やってもすべり落ちそうになる。すると、それまで黙っていた幼児が、一段低い積み木を指差して言った)

男児2 いつもここにあるじゃない。

(その間にも、さとし君は同じことを繰り返しては失敗し、だんだん半泣き状態になる)

さとし君 えーん(重い板を必死に持ちこたえながら)。

男児2 ここ(「積み木が高いと板の勾配がきつくなるから滑ってしまうんだよ。低いところなら大丈夫だよ」とでもいうように、同じところを指す)。

さとし君 わー(また落ちる。小さな手で支える。顔が真っ赤になる)。ここにするとちっちゃいから(低いと傾斜がゆるくなつてつまらないから、の

意か)。ここをね、何かでつ・ぶ・せ・ば、できるの(強い調子で)。つ・ぶ・してよ、だれかここへ、何か乗つけてよ。わっ、これがちゃんとしてくれないから(板が滑り落ちるので、立てかけた板の上辺に別の積み木を重しのように乗せて押さえればよいと考えたらしい)。

男児1 はい、はい、はい。(この子は極めて協動的で、正方形の積み木を頭の上まで抱き上げ、よるけながらも懸命に板の端に乗せようとする)

さとし君 まだ!これが乗ったらだよ(自分が板を差し掛けたら、の意か)。ここにつぶして。あきくん、あき、ここに、つぶすんだよ。ちがうの。こ、つて落ちるじゃん。放してごらんよ。こ、落ちるでしょ。ここにね、つけるつて僕は言ったの。ここにね、もう、やだー、やるつて言ったんだよ。うーん、できないよー。

(もともと無理な相談なのである。厚紙なら端を折つてのり代のようなものを作り、その上に

重いものを置けば固定されるのだが、これは分厚い板である。ついに、さとし君も持ちこたえられず、ばたと落ちてしまった)

さとし君 だからやなんだよ(後はことばにならない。地団太を踏んで悔しがる。その間に二児は箱を持ち上げて何とかしようとする。さとし君ももう一度だけやってみる気になる)。ここ、ここ(と指した指が、このとき箱と箱に挟まれてしまった)。あ、いたい!どうにかできないのかなー(泣き声)。

男児1・2 いちにの(二人は、なお箱を顔のあたりまで持ち上げてさとし君が板を差し掛けるのを待つ。さとし君がもう一度やろうとしたとき他の積み木を押したため、全部ががらりと崩れてしまった)。

さとし君 わーっ(しゃがみこんで泣き出す)。

幼稚園ならどこでも日常茶飯に見られる光景であろ

う。筆者はビデオ(「きょう、きてよかったね!」岩波映画製作所)でこの場面を見たとき不思議な感動に襲われた。そして、それからというもの、コミュニケーションについて考えるたびに、何とか自分の思いを分かってもらおうと「つぶして、つぶして」と訴え続け、うまく伝えられなくて癇癪を起こし、最後に泣き崩れるさとし君の姿が思い出されるようになったのである。一人より友達と遊ぶほうが楽しい。でも一緒に遊ぶためには、意思疎通を図らねばならない。しかし、気持ちの橋渡しをするには「ことば」が不可欠だ。でもそのことばはいつも相手に理解されるとは限らない。そのときの、分かってもくれない気持ちほど人間を苦しめるもの



はない。泣きじゃくるさとし君の姿は、他者と社会的な関係をとり結ぶことなしには生きられない人間の宿命的な苦しみを原初的に示しているといえよう。いま、私たちは、いじめ、不登校、中途退学、校内暴力、学級崩壊など数多くの深刻な問題に直面しているが、当の子どもたちの心の根本にあるのもまた、この「分かってもらえない哀しみ」ではないだろうか。筆者には、彼ら一人一人にさとし君の泣き顔がだぶるのである。次に紹介する少年もその一人である。

#### 中学校の美術室で

「好きな先生・きらいな先生」というテーマでの中学生、高校生による討論会を見た（NHK教育テレビ）。その中で、高校を中退し、今は大検準備中という生徒が、次のような中学時代の体験を語った。

「部活で保護者が見学にくるのがあって、で、美術部だったんですけど、で、おれはポスターをやってて、他の皆は粘土やってて、で、おれはあのーまだ仕上

がってないからポスターやってて、一緒にやるとやっぱりあの作ってるものが違うからっていうんで、女の顧問の先生が、じゃ君は、長い机が前にあるんですけど、ま教卓みたいな、そこでやりなよっていうことになって、でやってて、で後になってー、男の顧問がもう一人いるんですけど、お前一体なにやってんだと、お前一人だけ勝手になんであそこでやってるんだと、で、おれは女の先生に言われてー、ここでやってたんですって言っても、や、お前がおかしいんだ、お前は普通じゃねえんだ、お前は一体何を考えてるんだ。

だっておれは女の顧問の先生に言われてやったんですって言っても、もう聞いてもらえないで、ぱしっともう全然もうカットされちゃう。だけどそれはー絶対おかしいわけでー、なんでこいつはこういうことをしたのかっていうのをー、教師は考えるべきで、それを考えなかったら人間なんてそんなやっていけないわけでー、そういうの絶対おかしいとおもうんですけど」。

先生の誤解だったのか、ふだんの少年の言動が尾を



引いていたのか。逆に少年が先生のことば、態度を曲解したのか。事の真偽は確かめようがないが、これもよくあるできごとであろう。別の中学生は次のように話す。

「良い先生やったらちゃんと聞いてくれるのや。こっちが黙っとつてもな、何してんのかって。何か悩みがあんのかって。嫌いな先生は何も聞かんとな、すぐ怒鳴んのや、俺がちよつとうるさいからって。こらーとか叫んで来んのやんか。俺のこと何にも知らんで言うのがむかつくのや」。

こんな具合に、出席した中学生は、口をそろえて「先生は自分達の気持を分かってくれない」と訴えるのだった。そこには少年期特有の甘えが無いとは言えず、こわそうな茶髪の高校生の先輩から、「しよせん他人なんだから、そんな全部わかってもらええるわけないんですよ。大体、教師に理解してほしいって言うけど、自分が一歩大人になって、自分も教師を理解するべきなんですよ。お互いが理解し合えればそれが

一番いいんですけど、そんなの滅多にないから、向こうが理解してくれないんだったら自分が理解して接すればいいんですよ。教師にだけ自分を理解してほしいっていうのはただのわがままじゃないんですか」とたしなめられる場面もあったのだが、次のようなことばを聞くと、必ずしも中学生たちの発言を一方的だと決め付けることはできないようだ。

「なんか、生徒の気持をわかってーとしてー、わかるかわからないか別としてー、わかってーとするっていうのが生徒に伝わってくるんですよ。ああ、この先生おれのことわかってーしてるみたいな、すごく、自分にいいようにっていうか、なんか、積極的にやってくれてるっていうのがそれがわかると別に自分の気持が理解されるかされないかにかかわらず、信頼はわきますよね」。

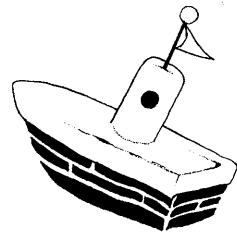
子どもたちは、現在、対教師だけでなく、同じようなコミュニケーション不全を友達や親との間でも抱えているに違いない。多くの不幸なできごとはそのこと

を抜きにしては理解できない。いや、実はそれより恐ろしいのは、教育学者の佐藤学氏の言である。氏はこの二十年間に五千を超える授業に立会ってきたというが、最近の子どもの著しい特徴として「他者への徹底した無関心」をあげている。コミュニケーションがごく狭い範囲の仲間内に限られ、そのサークルの一步外側の人間には何の関心も示さない。クラスに不登校の生徒がいても、誰も気付かないというのだ。筆者としては、コミュニケーションのねじれによる突出した事件より、むしろこちらの方が気になってならない。人と関わらなければ摩擦は起きないだろう。でもそれでは、相互理解は深まらず、人間の成長にとって一番大事な、他者との葛藤による自己発見や自己変革は到底望めないではないか。

### 葛藤をへて相互理解へ

ここでもう一度、幼稚園の遊戯室に戻って、その後のさとし君たちの様子を覗いてみよう。積み木が崩壊

してさとし君が泣いているのを年長さんが見つけ、「いい考えがあるよ」と言って、素晴らしいアイデアを思いつき、結局二段の滑り台を完成させたのである。滑り台といって



も子どもが滑るのではない。実は、さとし君たちは、だいぶ前から、「ミニ四駆遊び」といって、手のひらに乗るような小さな輪を転がす遊びに熱中しており、斜面とみればどこでもそれを転がして楽しんでいたのであった。年長さんが思いついたのは、問題の板をいきなり床に置こうとせず、少し低いもう一つの箱に渡す。これなら角度がゆるいので板はすべり落ちない。そこからもう一枚、板を継いで、同じ高さの箱に差し渡す。こうすると、結果的には、途中で男児2が主張した形と似るわけだが、全体の高さは最初にさとし君

が思い描いた通りになるのである。この新しいコースはたちまちさとし君たちのお気に入りになり、何度も何度も輪を転がし続けるのであった。そこには、もうさっきのしかめ面も泣き顔もない。あるのは、葛藤の末に気持を通じさせた者のみに見られる晴れやかな笑顔だけだった。そして、それを見守っている年長さんもうれしそうな表情である。不覚にもここで筆者は涙を流してしまった。コミュニケーションの語源は「分かち合う」ことだそうだが、園児たちはこのときまさに皆で心を分かち合ったのである。さっきは、分かってもらえない哀しみを味わったが、それを乗り越えれば、こんなに素晴らしい世界が待ち構えているのだ。この成り行きは、子どもたちにはもともとコミュニケーションしたくてたまらない心と能力が備わっていることを示唆している。

この原稿を書いているちょうどその日の新聞（九八・一二・二〇）は、どこもそろって横浜市港南区で、区内三十二校の小・中学生たちが、自分達の手で

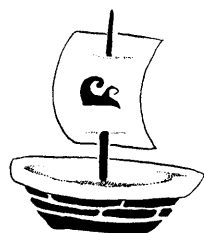
いじめを話し合う「こどもフォーラム」を企画・開催し、教師やPTAも含め、五百人の人々が参加して大成功をおさめたと伝えている。何とも勇気のわいてくる話ではないか。

願わくば、これからの教育の中心にコミュニケーション能力（葛藤をへて分かち合う心）の育成を据え、この横浜の小中学生のような、他者との関わりを厭わず、問題を分かち合って解決していこうとする子どもたちをどしどし輩出してほしいものである。その過程で私たち大人もまた自己変革を迫られ、コミュニケーションを共に学んでいくはずである。

（お茶の水女子大学）



# 風と子どもたちと



前田 志津子

十一月のある日、私は子どもたちと一緒に風揚げをしようと考え、白いビニル製のグニャグニャ風を子どもたちの目の前に出しました。白地であつたので、子どもたちは、「えをかいて」「ミッキーマウスのえをかいて」と要求しました。そこで私は、大空のなかでもよく分かるように大きく輪郭を描いたのです。色を塗るところは子どもたちに手伝ってもらいました。二本の竹ひごをビニルに取り付け、五〇メートルの長さの風糸を結び付けて出来上がりです。風を持って子どもたちと大学のグラウンドに出ました。

始めは、ミッキーマウスの絵を描いたグニャグニャ風を持って走っているだけで、「あがった、あがった、あがったよ」と喜んでいる子どもたちでした。そのうち、ちょうどよい具合の風に乗って風は、上へと揚がっていきます。急いで風糸を解く状況になりました。あつという間に五〇メートルの風糸が足りなくなり、八〇メートルの風糸があつたので繋ぎ足すことにしました。おもしろいように風がぐんぐん空に引き込まれていきます。

八〇メートル繋いだのでは、まだまだ揚がっていきそうです。さらに八〇メートル、私は調子にのって、また八〇メートル繋いだのですから、二九〇メートルということになります。子どもたちは、「一〇〇メートルはあるよね」と互いの顔を見合わせてそう言っています（「二〇〇」という数は子どもにとってはとても大きく感じるようです）。

そこで私は「三〇〇メートルだよ」と力を込めて伝えました。一〇〇が三つもあるということになるので大変になりました。子どもたちは大騒ぎです。風に向かって「どこまでいくーん」と叫んでいます。真剣な顔で「せんせい空がやぶれたらどうする」「このままでは、飛行機にぶつかるかもしれない」「たいへんだよ」とワクワクするやら心配するやら。もう居ても立っても居られなくなりました。「園長せんせいよんでくる」と園長室に駆けて行きました。

（風は子どもたちの様子を、悠々と大空からみていたにちがいありません。）

その間、私は風の行方がよく掴めるように五メートルくらいの間隔で風に向かって風糸

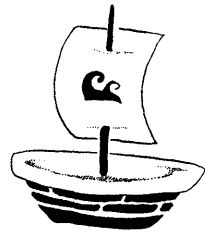
に赤いリボンを結び付けていきました。これでよく分かります。赤いリボンのしるしを追っていけば風がどこにいるのか。

園長室からグラウンドに戻ってきた子どもたちは、元気がありません。「園長せんせいは、いなかったよ」「どうしようか」とがっかりしている様子です。

そこで、私は風糸に沿って結び付けた赤いリボンのしるしを指さすと、子どもたちは黙って目で追っています。「あったあった」「いたよ」「よかったー」と風の様子にほっとする子どもたちでした。

約三〇メートルに伸ばした風糸を代わる代わる持つてみます。「ウーン、ちからがあるよ」「おもたいよ」「手がいたくなる」と風糸を引く感触を味わうことができました。しかし、いつまでも糸を引いていることはできず、サッカーゴールの柱に風糸を結んでおくことにしました。

風をおよがせたまま、部屋に戻ってお弁当を食べることにしました。保育室からは、グラウンドがよくみえます。グラウンドの北側には、高さ三六九メートルの城山があります。風は城山の西側にみえています。お弁当を食べながらも風の様子を見守っている子どもたちです。



ところか、いつのまにか風の姿はみえなくなっていることに気がつきます。「風がみえない」「風がいなくなった」「風がきえた」「風がどこかに行ってしまった」と、またまた大騒ぎになります。もう食事をしているところではありません。みんながグラウンドに一目散に出て行きました。

赤いリボンのしるしを伝いながら、風糸を追っていきます。するともうこれ以上は行くことができないというグラウンドの一番西の端のフェンスのところまで行き着きました。子どもたちは、フェンスにしがみついて、風の行方を探しています。「かえっておいでー」「かえっておいでー」と何度も風に向かって叫ぶ声もありました。

自分たちの力ではどうすることもできないと考えたのでしょうか。「そうだ、園長せんせい呼んでこよう」と言って再び園長室に駆けていきました。

今度は園長先生はいらっしゃいました。風を心配している子どもたちの話を聞き、風の行方を調べてくださいました。フェンスの向こうにみえる池のそばの樹に風糸が引っ掛かっているのが分かります。風はきつとその付近にいると思われます。園長先生は、「池の近くまで行ってみましょう」と言って風を探しに行ってくださいました。

その間、子どもたちはグラウンドでずっと待っていました。しばらくして園長先生は、戻ってこられました。あの風を連れて。「園長せんせいが、かえってきたよ」「風も一緒にかえってきたよ」「やったー、よかった」と大喜びです。そして子どもたちは無事に

戻ってきた風を抱きしめていました。

この日の風とのかかわりをおして、様々なことを感じる事ができました。風への思い、悠々とおよぐ風が突然消えてしまい、必死になって「かえっておいでー」と探す子どもたち、風への愛が窺えます。約三〇〇メートルという距離感、また風糸を引く重み、風の威力も感じたことでしょう。

風揚げの遊びはその後も続いていきます。その子どもの姿のなかに、風の状態を心でみる様子が窺えました。朝登園してすぐにグラウンドに出て、その日の風の状況を報告する子どもがいます。日によって風がちがうということがみえてきました。風が揚がるかどうか分かるようです。「今日の風はだめです」と言うので、「どうして」と聞くと、「台風みたいな風だから、風があばれる」というのです。また「今日の風は、風が揚がりません」、風は弱く、揚力がないと感じているのでしょうか。

風と子どもたちとの遊びのなかで私も楽しませていただきました。

(福岡教育大学教育学部附属幼稚園)



# 保育的課題へのまなざし(1)

― 友達関係の生成をめぐって

戸田 雅美

はじめに

保育においては、その時その時の課題が保育する者の意識の中心に昇っては、いつの間にか課題ではなくなり、また次の課題が立ちあがってくるというプロセスがある。けれども、保育者にとって、その時々

の課題はかなりのつきりと意識できるにもかかわらず、「いつの間にか」それらが課題でなくなるために、その変化の意味についてその時点で立ち止まって考えることは、それほど容易ではない。

現在私は、保育学研究者としては非常に幸せなことに、子育てをする機会に恵まれている。日常の子ども

の保育を継続的に記録しながら、それによって、私の保育的課題が自覚されてくることがあり、また、その変化に気づくこともある。けれども、その時にはすでに次の課題が切実な問題となっていたり、また別のどうしても記録しておきたいと感じる一連の事実が待っていたりして、その変化の意味を立ち止まって考えることはあまりしていない。けれども、その時を逃してしまうと、その変化の意味を考えるために必要な細部の情景の多くは、私の意識から遠ざかってしまっているのである。

長い時間を経て、記録を振り返った時に見えてくることも、きつとあるであろう。けれども、その時々課題の変化を感じる時に、その変化の意味をその時点で立ち止まって考えることによってしか見えてこないことも、あるはずであり、それは、時を経て振り返った時に見えてくることは、また違った質の考察となるのではないか。

ここでは、保育的課題へのまなざしを、その変化の意味に立ち止まって考えてみたい。

### 保育的課題としての友達関係

Aはこの時ちょうど三歳。保育園へは行かせていないので、ずっと家庭で、研究者の両親（夫と私）を中心に、ベビーシッター、祖母が交替で保育している。日によって、Aとつき合う大人は代わっても、場や物が変わらないためか、一人であれこれ独り言ったり歌ったりしながらよく遊んでいる。

けれども、公園や児童館で出会う子どもはいても、Aにとって「友達」と受け止められるような子どもはいないのではないかと感じていた。それは、Aが他の子どもがいると、積極的にかかわろうとするよりは、少し離れて自分の遊びを始めるような子どもだったこともあったし、保育している大人が日毎に変わると、公園や児童館での大人同士の関係ができにくいという

理由もあったように思う。とはいっても、Aの行く公園や児童館は、いわゆる公園デビューをしなくてはならないような人間関係だったわけではなく、変則的な形態で保育している私達も、Aも、その場の大人の人間関係から排除されたという思いはしていない。

Aの年齢や環境を考えると、Aに「友達」と受けとめられるような子どもがいけないことは、特に問題とは考えていなかった。むしろ、Aにとつては、見える範囲や、手を伸ばせば届く範囲に同じくらいの子どもがいることそのものが「友達」といえるかもしれない。けれども、「公園で他の子どもがいても、全然近くに行かない」「外に行くとしごくおとなしくなってしまう」という祖母の素直な感想を聞くと、その原因は大人が日毎に代わるためもあると考えていただけに、Aはどのように「友達」という存在と出会うのだろうか、と考えることも多かった。そういう意味で、Aの友達関係の問題は、私の中で保育的課題となっていた。

た。

### 「友達」としてのBとの出会い

Bは、Aよりも八か月年齢が下だが、年齢よりも身体が大きくてAとほぼ同じくらい、走るとAよりもずっと速い。Aが二歳半くらいの頃から公園で出会う子どもの一人だった。Bは、出会った頃すでに友達と遊ぶのが大好きで、Aのやることにも興味をもってすぐに真似をした。

り、ついて歩いてみたりしていた。

それでいて、Aの使っているものをめっちゃめちゃにすりょうなこともなかった。

そのうち慣れて



くると、自分が玩具を使うと、同じようなものを「Aちゃん使いな」と渡してくれたりした。また、手をつなぐことも大好きで、よく「Aちゃん手つなご」と言っでは、二人で手をつないで歩いたり走ったりするようになった。当然のことながら、Aにとってそれがしたい時ばかりではないので、Bの母親が「今はAちゃんはこっちでしたいんだって」と止めに入ることもあったが、Aも、そんなBのかかわりに慣れてくると嬉しそうに手をつないで走ったり、Bの差し出した玩具で言われるままに遊んでみたりするようになった。私達がAに「BちゃんはAより小さいんだよ」と言っていたので、Aとしては、小さい相手に合わせているくらいのつもりだったかも知れない。

こうして変則的ながらも一週間に一、二回は一緒に遊ぶうちに、公園でAとBが手をつないで一緒に走る二人を見たおじいさんから「この二人は双子かね」と声をかけられるほど仲良さそうに遊ぶようになった。

また、お互いの家にも往き来するようになり、家が近いこともあり、Aの家で遊んでから、Bの家でも遊んだりもするようになった。けれども、「今日Bちゃんと遊ぼうか？」と聞くと「遊ばないの」ということの方が多く、大人があれこれと誘って遊ぶことになることが続く。どこまで誘うのか、そもそも何故誘うのかと問う中ではつきりと友達関係を保育的課題として自覚化するようになった。

Aが三歳になる頃のある日、午前中から昼過ぎまで公園でBと遊んだ。ブランコに乗ってAが「おなべ」と言うとBも「おなべ」と言い、Aが「なす」と言うのと「なす」と言う調子でブランコのゆれに合わせてAの言葉をBが真似するという、リズムを身体全体で共鳴させ合うような遊びが盛り上がり、一時間近くブランコで遊んだりもした。昼食のためにBと分かれて戻ってきた自宅の玄関で、突然Aが「Bちゃんってかわいいわねえ」と言う。「今日楽しかったねえ」などと

感想を言うことはしばらく前からあったが、他の子どもについて感想を言ったのは初めてだったので驚く。

ところが、その翌日はAの家で遊んでいて遊具の取り合いになった。Aの家の遊具はBには新鮮でAの使うものは何でも使ってみたくなるといふこともあったようだったし、Aも自分の玩具といふことでBの言うままに譲る気持ちにはなれないのか、力で取り合いになったり、Bが泣いたり、Aが泣いたりした。そろそろあまり大人が仲介に入って取り合いを止めてしまわなくても大丈夫かも知れないと様子をみていたこともあった。とはいふものの争いが終われば楽しそうで、別れを惜しんで「さよなら」をした。その夜入浴中にAが突然に「Bちゃんついでやだね」という。私は取り合いのことならお互いさまと思う気持ちをとりあえずおいて、「そうね、でもかわいいところもあるよね」と答えた。

二日間続いてBについて言った内容は、全く反対の

ことだった。しかし、その両方の思いに、私は、Bのことが今まで出会った子ども達とは違う思いの対象となってきたのを感じた。一緒にいるととても楽しいこともあって、でも、時々嫌な思いをすることもあつた。私はこの感想をAにとつての「友達」が存在しつゝあるものと理解した。

### 終わりに

この後、保育的課題として「友達」関係が意識される出来事があった。この変化についても、いずれこの続編としてまとめておきたいと思っている。

(鶴見大学女子短期大学部)

# 二十五年ぶりの教育実習

—イギリス公立幼稚園保育参加顛末(5)—

豊田 一秀

はじめに

前回、私は自分の体験からイギリスの保育者が、幼児に「応える」事よりは、どちらかと言えば「与える」事に関心を置いた保育を行っている点について述べた。そして、その理由を探るべく、イギリス版教育要領とも言える『幼児の学びへ向けての望ましいねら

る』(DESIRABLE OUTCOME FOR CHILDREN'S LEARNING)の内容について説明した。<sup>注1</sup>さらに、それが日本の『教育要領』に比べて、(1)大人の計画した事項を直接的に学ばせようとする姿勢が見られる事。(2)各項目の内容が具体的であり、且つ知育的な発達を求める姿勢が直截に出ている事を指摘した。

このイギリス版教育要領を日本のそれと比較して、

どちらがより優れているのかという議論をするのは余りに短絡的であろう。教育というものは国家の歴史、文化の中でゆっくりと形成され、また変化してゆくもので、その時点における国家の情勢や、社会の要請に密接に関係しているからである。今回は、このような成文を産んだイギリスの教育の背景について簡単に見渡してみる事から筆を起こしてみたい。

### イギリスのナショナルカリキュラム

まず初めに、日本の学習指導要領にあたるイギリスのナショナルカリキュラムについて概観してみよう。日本では公立、私立に関わらず、文部省の学習指導要領に沿って授業が行われる事はいわば歴史的に自明性を持つ事である。しかし、イギリスにおいてこれが制定されたのは、今からわずかに十年前の一九八八年の事であるという事実は特記しておく必要がある。しかも、未だに私立の学校はこのナショナルカリキュラム

に拘束される事はない。イギリスに於いて、教育は私的な事項として考えられてきた歴史がある。そのイギリスが国家統一カリキュラムを持つに至ったのは色々な理由があるが、その中でも子ども達の学力の低下という問題が最も大きな理由であった。<sup>注2</sup>

さて、イギリスの義務教育は五歳から十六歳までである。因みに、イギリスにおいて五歳からの義務教育が制定されたのは一八七〇年である。しかし、イギリスには既にこの時から五歳以下の幼児を小学校に収容しなくてはならない事情があった。というのは、そのようにしないと弟妹の子守りをしていた幼児が学校に來られないからである。イギリスにも「おしん」的な時代があったのである。この伝統は今日でも残っていて、五歳以下の幼児（主に四歳児、時には三歳児も含む）を収容するレセプションクラスとして小学校の中に存在している。このように幼児教育が小学校教育と密接な関係、揶揄して言えば小学校の「おまけ」的な

位置に甘んじてきたと言う歴史がイギリスにはある。

こうした前提の中、前回、説明した『幼児の学びへ向けての望ましいねらい』が、ナショナルカリキュラムを下に降ろしたような形の、即ち、小学校教育に備える事を念頭に置いた形になったのもある意味で当然の結果と言えよう。さらに、一九九七年に政権を樹立したブレア氏率いる労働党が、総ての四歳児にも教育の機会を保障すると公約した事もあって、近年、政府はこのレセプションクラスの充実に向けて予算を投入し始めた。これを四歳からの義務教育化に向けての実質的な第一歩と考える事も可能であろう。三歳から四歳の子どもを保育している幼稚園（ナースリースクール）は公立、私立を問わず戦々恐々である。

## イギリスの育児風土と保育

第二に、上記の内容を持つ『幼児の学びへ向けての望ましいねらい』が産まれ得る背景として、保育者と

幼児の比率が挙げられよう。私が保育に参加しているクラスの例では、幼児二十三名に対して保育者は四名である（その内二名は非常勤）。イギリスでは、教育は私的な事柄と考えられて来たと同時に個人的な事柄でもあるのである。このような比率の中では、個々の幼児に対してきめの細かい指導をする事が可能となる。文学や数の指導などは、時に教師が一对一で教える様子も見られる。換言すれば、保育者の計画や意図が遂行されやすいとも言えるであろう。残念ながら、保育者の意図が実現されやすいと言う事が、そのまま幼児の意図が保育の中で実現されやすい事につながる訳ではない。私の目から見ると、保育者は保育計画を直截に幼児に提示する傾向が見られる。そして、幼児は保育者の要求に合わせているような雰囲気を感じられる。全体の空気として、保育者の権威が保たれている印象である。この、大人の権威が保たれているという点は幼稚園のみに顕在する事ではなく、広くイギリ



スの家庭にも見られる伝統的な一つの「大人と子どもの型」として捉えるべきであろう。

(一九九八年度の保育学会において、私は「複数の教師によるクラス運営の功罪について」という表題の下、イギリスの保育の特徴を述べると共に、日本のそれとの比較を試みた。その中で、日本の保育が母子愛着関係をモデルとした「愛着型保育」であるのに対して、イギリスの保育は羊飼いと羊の関係をモデルとした「羊飼いい型保育」と言えるのではないかと述べた。保育者の権威が強く、また「与えよう」とする傾向が強い事も「羊飼いい型保育」の一つの特徴である。詳しくは拙稿を御参照頂きたい)

### 柔軟なイギリスの保育者と、クラス運営の独自性

イギリスの保育室で受けた感想を基に、その奥に存在する制度と保育風土について簡単に述べてきたわけだが、そろそろ話題を現場に戻してみたい。本文の冒

頭に挙げたような二つの傾向を持つイギリスの「保育のねらい」であるが、これが総ての現場の保育者に歓迎されているわけではない。ある日、保育室に用意された算数的な事柄を教えるコーナーに子どもが一人も来ないのを私が冷やかしかつ気味に担任に指摘すると、「こんな子ども達にとって面白くなんかないわよ!」と、やや自嘲気味に答えるH先生であった。どこにも「子ども派」の先生はいるものである。しかし、制度的な要求が強まる中、現場の先生達が息苦しさを持っている事も事実のようである。

そのような中、先生たちの自発性に基づいた小さな変化が起こった。そのきっかけは私が先生達に見せた日本の保育ビデオである。こちらでお世話になっている先生達から、日本の幼稚園の保育に関して説明して欲しいと言われた私は、丁度、手元にあった文部省選定、岩波映画作製の『きょう、きてよかったね! サトシのこだわりと自分さがし』を見せる事にした。この

ビデオが、偶然、私の勤務していた幼稚園を舞台としていたので、私にとって説明しやすかったのである。

長期間「ミニ四駆あそび」ばかりする主人公のサトシに対して、イギリスの先生たちの第一声は、自分の興味を持った遊びをこれほど長い期間続ける事が出来るのは大したモノだ、というものであった。そして、先生たちは活動の「片寄り」に心配しつつも、担任がその遊びを無理に他の方向へ向けさせようとしていない点に感心していた。子どもが自分で選び取った遊びは長く続き、自らの遊びの中に遊びを発展させて行く力を秘めている事など話し合った。

そのような事があったのち幼稚園に行ってみると、今まであった十時過ぎの集まりがなくなっている。以前は、この時間に一度子ども達を保育室に集めて、本を読んだり果物を食べたりしていたのだが……。先生に聞いてみると、子ども達に出来るだけ区切りのない長い自由な時間を与える事が、子どもが深く遊ぶため



▲お母さんを思い出して、悲しくなった子を抱っこする先生。隣の子が「わたしも、だっこ！」

に大切なのではないかと話し合ったとの事。ビデオが  
良い刺激になったと話してくれた。そして、もう一つ  
面白いと思った事は、そのようにタイムテーブルを変  
えたのは、最初はひとクラスだけだった事である。後  
に他のクラスもそのように変化させたようだが、いず  
れにしてもクラスを担当する先生たちの考えが尊重さ  
れていて、担任が工夫出来る余地が多く残されている  
のである。管理的な色彩の強い幼稚園に勤めている保  
育者には羨ましい事だろうと感じた。

子どもの遊びを育てる為に、自由な時間を彼らに与  
える事が非常に大切な事であるという点について、多  
くの保育者や母親に異存はないと思う。しかし、時間  
さえ与えておけば子どもが良い形で遊び始めるかと言  
えば、事はそれ程簡単な問題でもない。そこに、子ど  
もの存在を守り、遊びを支え、遊びに応えようとする  
大人の存在が重要な意味を持つてくる。子どもの何に  
どのように応える事が、子どもの遊びを支えた事にな

るのだろうか。これは深い問題である。子どもに「時  
間」を与えたイギリスの先生達と、次にはこんな事につ  
いて話し合ってみたい。

(ローハンプトン インステイテュート ロンドン

客員研究員)

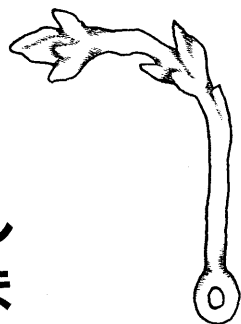
#### 注

1 この成文は一九九六年に保守党政権によって作られたも  
ので、イングランドとウェールズに適用される。しかし、  
スコットランドは独自の教育制度を持つために、この成文  
には拘束される事はない。なお、一九九八年十一月現在の  
情報として、この成文は労働党政権によって近々、一新、  
あるいは修正されるという事である。

2 近年のイギリスの学校教育の変化については『変わり行  
くイギリスの学校』(清水宏吉著、東洋館出版社)に詳し  
く書かれている。

☆ このシリーズは今回で終わります。

子どもの本から



## しまのずれたとら

大沢 啓子

“お医者さんごっこ”は子どもたちの大好きな遊びである。決して変な意味にとらないでほしい。健全なごっこ遊びの話だ。昔も今も子どもたちは遊びの中で演じる。お医者さんになった子は聴診器を胸にあて、ときには頭や足の音まできいたり、注射をしたり、病人になった子は痛そうに足をひきずったり、この時とばかりにくったりとして甘えて役にな

りきる。看護婦さんはやさしくて、熱を計ったり、包帯をまいてくれたり、薬を飲ませてくれる。どの役もおもしろいので役割を交代して、また遊びがついていく。

『ぼくがげんきにしてあげる』は小さなとらと小さなくまのそんなごっこ遊びのようなお話だ。

主人公の小さなとらと小さなくまは、ドイツでは

いったいなんの病氣なのだろう。原因不明のぐにやぐにや病か。甘ったれのとはは、本の一頁めからもうたおれてしまつて登場する。そういえばこの本では、とらがまともに自分で立つてゐる場面は見あたらない。いつものびてゐるか、だっこされてゐるか、ごろごろねそべつてゐる。どうしてこんなにデレデレとのびてゐるのだろうか、まるで赤ちゃんのように誰かの支えがないといられない。でもこの絵本をみてゐる読者は、このデレデレを許してあげる気持ちになつてゐる。むしろこのとらを、かわ



『ぼくがげんきにしてあげる』  
ヤーノシユ作 石川素子訳  
徳間書店 一九九六年

いー”と思っているにちがいない。他の登場人物たちもだれもとらを赤ちゃん扱いしたり、叱咤激励したりなどしない。とらの気持ちに添ってあげ、何とかしてあげようと一緒になって困っているようにみ

える。

たおれた病人には、いろいろな手当ての方法がある。まず、痛いところに包帯。それから温かくておいしい食べ物。ベッドに寝かせて、そばについてあげることと不安をとり除く上では大切だ。小さなくまの看護のおかげで小さなとらはすこしずつ回復する。が、完全には治らない。どうやら本当の病氣らしい。

そして、何やらあやしげな、でも小さな仲間たちにとってはとても信頼できるお医者さん、あわがえる先生にみてもらうことになる。あわがえる先生の正しい診断（？）とおまじないのような治療や、やさしい看護婦かものルーチーさんやがちょうやうさぎなどお見舞いに来た仲間たちの心づかいなど、たくさんの方の暖かさに包まれ、のんびりとゆかいな話の展開で小さなとらは元気になっていく。

とらの病氣は、レントゲンの結果「しみが一本ず

れている」ということだった。それは簡単な手術で治るといふ。気持ちのいい注射をするとなむってしまいつてきな青い夢をみる。その間に手術をするというのだ。とらのしまつて本當にずれるのだろうか？ しかも外からみてもわからなかつたのにレントゲンでそれがみつきり、手術でもとに戻すとは、一体どうやるのだろうか。読者の不思議はふくらんでいく。――何と楽しいお医者さんだろう。子どもが、お医者さんにつれて行かれていやだつたり不安に思ふことが、お医者さんごつこの中ではどれも、こわそうでこわくない、痛そうで痛くない、楽しい世界になつてしまふ。

一方、画面の片すみには一頁めから終わりまで小さな小さなカエルとおもちゃのトラのトラガモが描かれてゐる。カエルとトラガモはとらとくまの一部始終を見ながら、全くのマネつこで演じつづけてゐる。おもちゃのトラガモをとらにみたて、小さなカ

エルがひとりくまになりきり、トラガモのお世話を  
かいがいしく演じている。ここにもごっこ遊びの世  
界が展開している。

元気になったとは、また、くまをはじめ仲良し  
の友だちにつれられて、鳴り物入りの行列で病院か  
ら無事、家に帰ってきた。このごっこ遊びもそろそ  
ろ終わりになってきたところで、くまが、遊びの役  
割交代を提案する。

くま「来年は、ぼくが病気になるから、きみがぼ  
くを元気にしてくれるよね」——とら「もちろ  
ん！」

仲良しの二人は、これからこうして支え合って  
いい関係を作っていくのだろう。ところで、この二  
人のごっこ遊びは果して役割交代ができるのだろう  
か。それはちよつとあやしいが、甘ったれでデレデ  
レのとらちゃんだつてくまにとってはきつと、大き  
な大きな心の支えになっているにちがいない。

ヤーノシユの作品はどれも、子どもたちのささや  
かで素朴な願いをユーモラスに描きかなえてしてく  
れている。もう一度、表紙を見てみると、くまがとら  
をだき抱えて運ぶ方向に「パナマ」という立札が小さ  
く描かれている。ここでは唐突な立札だが、この二  
人にとってパナマは、かつて探し求めた「パナナの  
かおりあふれるあこがれの国」なのだ（前々作『パ  
ナマってすてきだな』あかね書房）。くまが、ぐつ  
たりなつてしまったとらを優しく抱いて我が家へ運  
ぶところなのだが、そこは、二人のあこがれの地、  
パナマでもあったのだ。

（舞々同人）

☆ 二月号五十二頁上段一行目の『ドイツ おもちゃの王国』  
は、『ドイツ おもちゃの国の物語』の誤りでした。お詫  
びして訂正いたします。

# 編集後記

今月号から新連載が始まります。

「子育ての探究」(柴崎先生)と「保育現場からの現代幼児論」(友定先生)は六回、「コミュニケーション能力を考える」(村松先生)は三回を予定しています。この複雑な今の時代に、子どもと共にどうあつたらいいのか、一緒に探してみたいと思います。

\*

世界各地の子どもたちを撮った写真展に行きました。いくつかの作品から、子どもの心をひきつける水の魅力に気づきました。

手押しポンプつきの井戸が残っている公園がありました。そこには体

全部を使ってポンプを押して水を出している楽しそうな子どもたちが写っていました。一方で、まだ小さくて自分で水を出すことのできない子を写した一枚もありました。

その子は井戸の前で、自分の背と同じ高さにある蛇口の下に両手を差し出して、今にも落ちて来そうな一滴を待っています。その瞬間を待つて見つめる真剣な目。いまにもその一滴をつかもうとするかのような十本の指先。その緊張感から私は雪がすぐにも落ちてきそうに思いました。けれども、この子は既に両手で受けた一滴をなめて次の一滴を長い間待っているのだと説明が付されていました。

幼い子に、こんな姿勢を長い間続けさせる不思議な力が、水にはあるのです。

(A)

## 幼児の教育

第九十八巻 第四号

(一九九九年四月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十一年四月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五丁目二丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三―五三九五―六六二―三(営業)

〒〇三―五三九五―六六〇―四(編集)

振替 〇〇一九〇―二二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレール館にお願いたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



# 子どもが見える、保育が見える

ひらめの会 編著

編集責任／平井信義・本吉圓子・立川多恵子

発売中

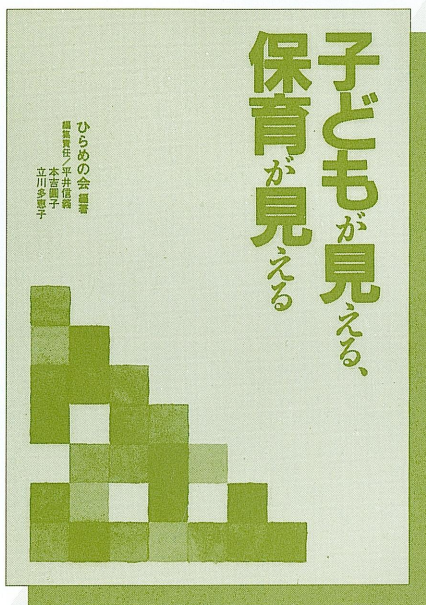
## 保育に花を咲かせましょう

心踊らせて保育の現場に飛び込んだものの、保育しにくい子どもに困ったなど感じたり、同僚・先輩と保育の意見がかみ合わず人知れず悩んだり、保護者との対応に戸惑うといった経験をされてはいませんか。

本書はそんな悩みをお持ちの保育者に、さまざまな角度から問題解決の糸口を示してくれる格好の保育入門書です。

明日の保育を実りあるものにしたいと努力されている方々にお勧めします。

## ◆好評既刊本！



A5判 288頁 定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 豊かな心を育てるフレーベル館の月刊絵本

絵本からたくさんの発見、驚きや話し合いが生まれるように編集しています。  
幼児の発達や保育のねらいに合わせてお選びください。

## 総合生活絵本

季節、生活、お話、歌のページなど、  
月々の多彩な保育活動に合わせて  
構成されています。

### キンダーブック①

定価350円(本体333円)

やさしさにあふれた誌面を  
通して、豊かな情操を育む  
年少児向け絵本。



### キンダーブック②

定価400円(本体381円)

絵本を開く楽しみを通して、  
感動や好奇心を引き出す  
年中・年少児向け絵本。



### キンダーブック③

定価410円(本体390円)

自然や社会観察を通して、  
実体験への活動を生む  
年長・年中児向け絵本。



## 総合学習絵本

ことば、文学、数量を中心に、さらに  
自然・科学、社会を加え、  
総合的に知的好奇心を引き出すよう  
構成されています。

### がくしゅうおおぞら

定価420円(本体400円)

ことば、文字、数量などの  
基礎を育て、考える力がつく  
年長児向け総合学習絵本。



## 科学絵本

本誌の特色であるリアルな絵、迫力ある写真で、  
身近な自然の不思議と驚異を感動的に伝えます。

### しぜん-キンダーブック

定価460円(本体438円)

自然の不思議・驚異を通して、  
科学する心を育てる  
年長・年中児向け科学絵本。



## お話絵本

子どもたちを夢中にさせる多彩なお話を、  
毎月精選してお届けします。

### ころころえほん

定価350円(本体333円)

楽しい会話が生まれる  
年少児向け  
スキンシップ絵本。



### キンダーメルヘン

定価350円(本体333円)

ファンタジー、冒険、夢などさまざまな  
タイプの物語の楽しさが味わえる  
年中・年少児向け絵本。



### キンダーおはなしえほん

定価370円(本体352円)

“おもいやり”をテーマに  
やさしい心を育む  
年長・年中児向け絵本。



### おはなしえほんベストセレクション

定価330円(本体314円)

フレーベル館のおはなしえほんの  
ロングセラーを、精選してお届け  
します。年長・年中児向け絵本。



## キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。